熊本県
【重点プロジェクト計画】

魅力ある資源を活用した中山間地域活性化の取組支援

活動期間：令和3年度～令和5年度

概要

○ 津奈木町の倉谷・古中尾地区は稲作主体の中山間地域で、水田面積は狭く、水稲収量も平坦地に比べると低い。地元酒造会社（亀萬酒造）向けに酒米「山田錦」の需要が高まっていたことから、**酒米を高単価作物と位置づけ作付けを開始。**

○ 酒米生産の情報共有の場として、生産者や津奈木町、亀萬酒造等で**酒米生産研究会を設立**。倒伏しやすく栽培が難しい「山田錦」について**栽培実証ほを設置して施肥試験を実施**した上で**栽培暦を発行**するとともに、**伴走型の支援を実施**。あわせて、**新たな担い手確保への働きかけを実施**。

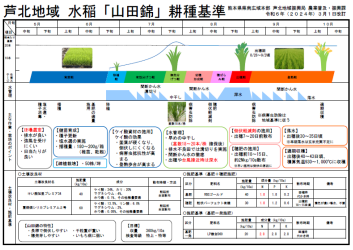
○ その結果、令和5年の**10a当たり収量は過去最高を記録**し、新たな担い手確保により**栽培面積が拡大**。必要生産量が確保できたため、**地元産酒米を使った純米吟醸酒「今茲（こんじ）」を開発し、ブランド化**。

具体的な成果

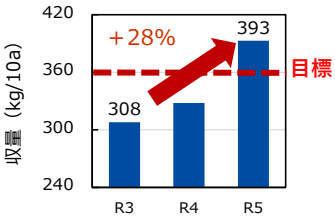
1 倒伏を軽減し、収量が過去最高を記録

■ 倒伏を軽減する栽培法を実証し、収量は向上することができた（R3→R5）。主食用米より売上も向上し、費用は抑えることができた（R5）。

①**収量** 308kg/10a → 393kg/10a
②**売上高** 9万9千円 → 14万4千円
③**費用** 9万4千円 → 8万円



栽培暦



収量の推移

2 新たな担い手の確保と栽培面積拡大

■ 亀萬酒造が農業に参入し、新規生産者も確保。栽培面積が約3倍に増加（R6見込み）。

①**生産者数** 3戸 → 6戸
②**栽培面積** 1.1ha → 3.0ha

亀萬酒造の農業参入

純米吟醸酒「今茲（こんじ）」

3 付加価値の高いオリジナル商品の販売・開発

■ 栽培法が確立されたことにより、**生産収量が安定化**
■ **津奈木町産の酒米を使用した純米吟醸酒「今茲（こんじ）」をブランド化**

普及指導員の活動

令和3年～令和4年	■ 酒米生産の連携強化を図るため、普及・振興課の呼びかけで、農業者や津奈木町、亀萬酒造等からなる**「酒米生産研究会」を設立**。 ■ 倒伏し収穫量が確保できなかった「山田錦」の栽培方法を確立するため、肥料の適正量・時期等を検証するための**実証ほを設置**。 ■ 倒伏軽減に重要な**中干しの時期に現地検討会を実施**。加えて、**定期的な個別巡回や講習会等を実施**。
令和5年	■ 亀萬酒造が法人として農地を借り生産できるように働きかけ、県の関連事業を紹介するなどの**農業参入支援を実施**。 ■ **主食用米生産者を現地検討会や出荷反省会へ呼び込み**、酒米生産者や亀萬酒造との交流の場を設置。酒米生産のメリット等を周知し、**新規生産者の確保による栽培面積拡大をはかった**。

普及指導員だからできたこと

- 専門技術を持ち、栽培実証試験設置の経験をもつ普及指導員だからこそ、栽培が難しい酒米の品種であっても、品種特性や地域性を加味した栽培方法を試験・普及させることが可能だった。
- コーディネーターとしての機能を最大限に発揮することで農業者、酒造会社、町、JA、メーカー等の関係者を結びつけ、酒米産地の育成に向けた取組を進めることができた。

熊本県

魅力ある資源を活用した中山間地域活性化の取組支援

活動期間：令和３年度～令和５年度

１．取組の背景

津奈木町の倉谷・古中尾地区は稲作主体の中山間地域で、水田面積は狭く、水稲収量も平坦地に比べると低い。さらに、米価の下落や生産資材高騰で農家の所得が減少するばかりであった。このような中、地元酒造会社（亀萬酒造）向けに酒米「山田錦」の需要が高まっていた。酒米は主食用米と同じ機械で生産できるため初期費用を抑えられることもあり、平成 29 年より当地区での生産を開始した。令和元年からは中山間農業モデル地区支援事業において、高単価作物と位置づけ取組みを強化した。

生産を開始したところ、「山田錦」の長稈で倒伏しやすい特性に合わせた栽培技術が未確立であったため、倒伏による収穫時の労力や収量減少が問題となった。台風の影響がなかった令和３年も、倒伏し収穫に困難を極めていた。

そこで、亀萬酒造へ働きかけ、当農業普及・振興課は倒伏を軽減する栽培技術の確立と普及拡大に向け、活動に取り組んだ。

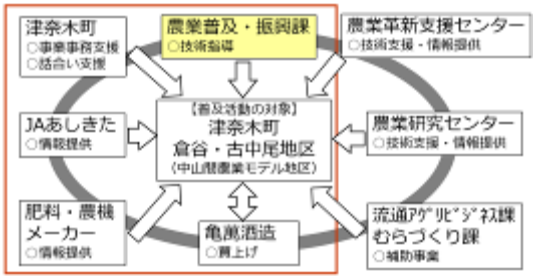


図１　関係機関との連携体制

２．活動内容（詳細）

（１）酒米生産研究会の発足

酒米生産の情報共有の場として、生産者や津奈木町、亀萬酒造等で酒米生産研究会を新たに設立し、重点指導を行うこととした。

（２）倒伏を軽減する栽培技術の実証と普及

①栽培実証ほの設置と栽培暦の発行

倒伏を軽減する栽培法を確立するため、肥料の適正量・時期等を検証するための実証ほを２カ年にわたり設置。得られた結果や先進地視察先の事例等を栽培暦（図２）にまとめ、地域に広く周知した。

図２　栽培暦

②伴走型の指導

特に倒伏軽減のために重要となる中干しの開始時期に現地検討会を開催し、各ほ場に適した栽培管理の徹底を行った（写真１）。加えて、定期的な個別巡回や講習会等により、伴走型のきめ細やかな指導を行い、生産者の意識・技術の向上を図った。

写真１　現地検討会の様子

（３）新たな担い手への働きかけ

①亀萬酒造への働きかけ

亀萬酒造では専務個人が酒米を生産していたため、法人で農地を借り生産できるように働きかけ、県の関連事業を紹介するなどの農業参入支援を実施した。

②主食用米生産者への働きかけ

主食用米生産者を現地検討会や出荷反省会へ呼び込み、酒米生産者や亀萬酒造との交流の場を設けた。その中で、倒伏を軽減できることや収益面でのメリットを周知し、新規生産者確保による栽培面積拡大を図った。

３．具体的な成果（詳細）

（１）倒伏を軽減し、収量が過去最高を記録

倒伏を軽減する栽培法を実証し、これにならい生産者が適切な肥培管理や水管理を徹底したことにより、令和５年産の 10a 当たり収量は取組当初の 308kg から 393kg へと 28%向上し（図３）、県内でもトップレベルに並ぶ産地に急成長した。主食用米と比較して売上高は 45%高く、費用は 14%低くなり（図４）、所得向上につながった。

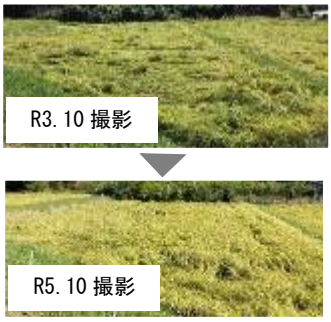


写真２　栽培技術習得で倒伏軽減

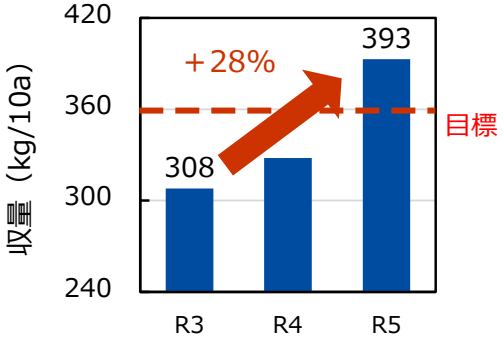


図３　収量の推移

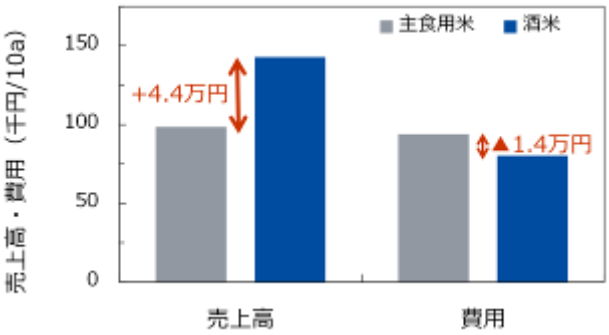


図４　売上高・費用（Ｒ５）

（２）新たな担い手の確保と栽培面積拡大

亀萬酒造が県南地域では初となる酒米生産で農業に参入し（写真３）、35a の農地で生産を開始した。これにより、担い手の確保や耕作放棄地の解消が期待される。

さらに次年度には新たに３名の生産者が生産に加わり、栽培面積は今年度の２倍強に、取組当初の３倍に拡大する見込みである（図５）。

写真３　農業参入に係る協定締結式の様子

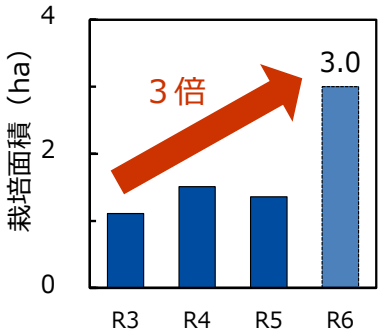


図５　栽培面積の推移

（３）付加価値の高いオリジナル商品の販売・開発

生産された酒米は純米吟醸酒「今茲（こんじ）」の原料に使用されている。

さらに、生産量が多く確保される見込みとなったことから、大吟醸の醸造も検討されている。酒米が津奈木町の特産物となり、付加価値の高い６次産業化、ブランド化など地域振興につながることも期待される。

写真４　純米吟醸酒「今茲（こんじ）」

４．農家等からの評価・コメント（津奈木町農林水産課　濱本主幹）

亀萬酒造の地元産山田錦で美味しい日本酒を作りたいとの想いでスタートした酒米プロジェクト。当初は、倒伏や収量が少ない等の課題に直面し、本町での山田錦栽培は難しいのではとささやかれていた。令和４年度からは県指導員の具体的な指導や耕種基準の提示により、課題を克服し収量増加へつなげる事ができた。今後もこれまでどおり研究会メンバー間の連携を図りながら、規模拡大を目指し、酒米プロジェクトの更なる発展に期待したい。

５．普及指導員のコメント（芦北農業普及・振興課）

今までの取り組みが実を結び、収量向上へとつながった。生産量を多く確保するため、今後は津奈木町での円滑な酒米生産につなげられるよう、入作の検討支援などを行う。津奈木町といえば酒米だと、多くの人から認知されるよう、今後も関係機関と連携して支援していく。

６．現状・今後の展開等

収穫時期の労働力不足のため、適期に収穫できないことによる品質低下が懸念されるため、遅植えの導入による作業分散の検討を支援する。また、新規生産者への支援を重点的に行うとともに、現生産者へ栽培面積拡大の働きかけを行う。これらが、ひいては、テロワール（土地の個性、酒を取り巻く環境）を津奈木町で造ることにつながるように支援する。